

におもむき、内淡路町三丁目、米屋徳兵衛方を旅宿とさだめ、その翌日から一〇月二七日までの一四日間、大坂城内に滞在していた信愛を毎日往診した。この記録はわずか一二丁の短い綴りで、信愛の病状や経過についてはまったく記載されておらず、医史学的にはあまりみるべきものはないが、ここに藩医奥山玄育の名が登場する。すなわち信愛の手医師として「奥山玄育、遠藤長庵、吉川道智」の三名の名があり、初診の一〇月一四日の条には

奏者案内にて書院へ罷通茶烟盆火盆等出家老人医者等
面会其後相診候事診了後坐于本席御容体等申述其後祝酒
料理等出申刻退出

とあって、玄育らは元凱と対診をおこなった様子をする事ができた。どのような交渉があったのか、この記録にはしるされていないが、信愛の容態や治療について相談がおこなわれたものと思われる。

元凱の往診や玄育らの治療の甲斐あって、信愛の病は無事全快し、この年の一二月二八日には床揚げの祝儀がおこなわれた。しかし翌文化二年（一八〇五）三月二七日、信愛は急病のため加番役のまま、大坂城内で死亡した。

この『請招記』で興味深い点は、元凱が京都の自邸へ書状をおくった日の頭に、算用数字で回数がふざれている。「1」から「10」までに問題はないが、「11」を「101」、「12」を「102」などと記載していることである。また金子の出納をしるした條の頭に「Gin」とローマ字で注がふざれているのも興味のあ

る所である。

山崎文庫にはこのほかにも、七部の元凱の往診記録が収蔵されている。

（平成五年十二月例会）

幕末薩摩藩と大円寺

中西 淳 朗

幕末の薩摩藩では、島津家江戸屋敷の菩提寺として、三田台町の大円寺（曹洞宗）と目黒行人坂の大円寺（天台宗）と関係があったという。しかし後者は嘉永元年以後のことであり、前者は延宝元年、島津光久の嫡子綱久の葬儀以来で、島津家との交際期間に百七十五年の差が両者に認められる。従って三田台町の大円寺の方が高輪の屋敷に近いこともあって、法事等の比重が大きくなることは当然である。

かの戊辰戦争の折、「横浜軍陣病院」に入院し傷病死した將兵の数を『横浜病院の日記』から数えろと十一番五十三名に達する。中でも薩摩藩は最も多く二十三名で、四十%をこす傷病死者数を占めたにも拘わらず、どこにどんな形で葬られたかは余り知られていない。そこで今回、『横浜病院の日記』を資料として、薩摩藩傷病死者等について調査した結果を報告した。

一、江戸切絵図の芝高輪辺図をみると、三田台町で伊皿子

台町との境に近い地に大円寺があるが、現在は杉並区和泉町三丁目五ノ十八に移転している。

二、戊辰戦争第二期(関東騒乱から東北戦争まで)での戦死者を祀る墓域を、薩摩藩と佐土原藩が杉並区の大円寺内に夫々接して作っている。

三、薩摩藩の墓域は西側に位置し、中央に「戊辰薩藩戦死者墓」という合葬墓が作られている。この寺の杉並移転は明治四十一年であるが、合葬墓が建てられたのは大正四年十一月となっている。

四、合葬墓の台座をよくみると、花崗岩の三ツの面に染付陶板七枚が組込まれており、そこに七十五名の戦死者の氏名、年令、死亡日、負傷場所、階級がかかれてある。

五、「横浜軍陣病院」で傷病死した二十三名については、下夫卒に至るまで全員がこの陶板に記載されている。

六、そのうち、士分の者の死亡日は『日記』と一致する。しかし、全員が負傷場所をもって死亡場所と記されている。

七、最も興味深いのは、やはり益満休之助であつて五月二十二日上野で死亡とあり、階級は隊外斥候役である。入院日は不明であるが、休之助の戦傷については関寛斎の『奥羽出張病院日記・第一番』の前書き部分に、神田三崎町の講武所で治療した記録があり、寛斎手記には五月二十一日に横浜へ向い患者を入院させたとあるから、休之助の入院日は五月二十一日で、翌日死亡と考えられる。

八、大円寺の薩摩藩墓域の東北隅に「三士墓碣銘」という

碑がある。三士とは日高喜次郎、伊藤庄助、福永弥七郎のことで、みな会津西街道の大内宿北東の大内峠で戦傷した。彼等は鹿兒島の北方の加治木の出身者であつた。即ち、出身地も、負傷場所も、死亡場所横浜大病院ニテ治ス遂ニ験ナク盡ク死スと銘記されている)も同じという劇的な結びつきであつた。明治六年三月にこの碑を建てたのは永田常心以下五十五人の郷里の友がらであつた。この碑によつて大円寺と横浜軍陣病院とのつながりが初めて確かなものとなつた。

九、この三士は、九月三日の大内峠の激戦で負傷し、半月近くかかつて横浜に來り、九月十六日に太田陣屋病院二番長屋は印部屋に入院した。日高は九月二十日、伊藤は同月二十五日、福永は十月十一日に死亡した。従つて、会津若松城の開城(九月二十二日・この日をもって戊辰戦争第一期終る)を知つたのは福永のみと考えられる。

十、京都市上京区の相国寺東門の外に薩摩藩の墓域があり、そこにも薩摩戦死者の合葬墓がある。ただしこの墓は甲子の役(蛤御門の變)の戦死者を含んでいる。また形態上の差異を認めるが、京都の墓の計測が出来なかつたので比較はしていない。

(平成六年二月例会)